

# ブツダの決定的な話

(仏道修行の核心を知りたい人のために)

SRKWブツダ著





S R K W ブ ッ ダ (2021年11月撮影)

## 目次

はじめに	8
覚りとは何か	10
誰もが覚ることができ得る根拠	15
覚った後、つまらなくないか	20
あつたものがなくなるといふこと	27
覚りのメカニズム	32
解脱知見	35
偽の覚者	41
優しくなくても覚りは生じる	47
精神的な成長と覚り	51
この世に自分一人しか存在しないならば	56

言葉によって解脱する	59
法の句について	63
三身仏は人間の中に存在している	67
発心（発菩提心）と仏種・仏性	75
目の前の人	80
功徳を積むということ	84
功徳を速やかに積む方法	88
知足と懺悔（さんげ）	95
世を厭う気持ちが定まること	100
善悪の軌を超えること	109
覚れないことを恥じるに及ばない	114
途中の実りが存在しないことについて	120

修行の中断について	125
性格と覚りの可否	129
経典の読み方	136
愚者は荷牛のように老いる	143
肉食と菜食	149
飲酒の可否	152
妻帯と覚りの可否	155
覚りの素質	160
聖求について	165
輪廻説の可否	173
争うことのない修行者	179
対等・平等ということ	184

筏の譬え	189
文化・芸術・宗教は決定的ではない	194
あとがき	197

## はじめに

誰もが、基本的には覺つてブツダとなり得る。これは、本当のことである。

なぜならば、覺り（＝解脱）の真相とは、何かを身につけた結果ではなく、心を覆う余計なものを取り除くことによつて達成されるものだからである。そして、それは言葉を縁として成し遂げられるものである。

もちろん、現実にこの覺りを達成するためには、いわゆる仏道修行に勤しまなければならぬが、その修行の實際は、功德を積むことに集約されることになる。

そして、約二千五百年前に釈尊が作仏し、ブツダとなつてからこの方、少なからぬ仏がこの世に出現し、この功德を積むことについての教えをいろいろと説いている。したがつて、覺りを達成しようと思う人は、それらの教えの通りに修行に勤しめば覺りが達成できる筈である。

ところが、時代が下るにつれて、覺つてブツダとなる人の数は減つてきているようである。その理由は、修行者が途中で仏道から逸れてしまつたり、あるいは道草を食つてしまい、生きている間に覺ることができなくなつてしまつたことによるものと見られる。

要するに、修行者が、仏道を歩むこととは関係のないことさらに気を取られてしまい、その解決に時間を要したり、あるいは少なくとも納得のいく結論に達しようとして、いたずらに時間を浪費してしまっているということが実情のようである。

さて、真実を言えば、仏道を歩むことについては、その要点さえしっかりと押さえて勤しめば、本来、道を逸れてしまう恐れなどないものである。また、修行が完成するまでの期間についても、特別に長大なものが要請されるわけではない。早ければ数年で、覚りに到達することができると言っても過言ではないということである。

本書は、仏道についての決定的な話を、ブツダの立場から述べたものである。本書を読めば、修行において何が重要で、何が取るに足らないことであるのかというその核心を知ることができようであろう。そして、こころある人は、速やかに作仏するに違いない。

仏道の何たるかが判然としない人は、本書を手にとって読んで欲しい。そうして、本来まつすぐである道をまつすぐに歩んで、人の最高のしあわせの境地たるニルヴァーナへと到達して欲しい。そう願って、本書を著した次第である。

## 覚りとは何か

世間の人々（衆生）にとっては、覚りは未知のことからであり、想像もつかない世界であろう。それにも関わらず、人々は覚りに興味を抱くことがあり、実際に修行を始める人さえある。

その理由として、大きく二つが挙げられよう。

一つは、単純に、好奇心から仏教のことを知りたいという人がいるということであろう。そして、もう一つは、苦悩を滅してしあわせになりたいという気持ちから、その解決の道として仏教修行に勤しもうとする場合であろう。

前者は、基本的には、仏教がどのようなものであるのかが分かれば良いということであるが、あわよくば覚りに達することを期待しているかも知れない。

その一方で、後者は切実であり、すでに人生の一部、あるいはすべてを仏道修行に捧げるという抜き差しならないものとなっている。

これらのことを踏まえて、覚りとは何かを述べなければならぬであろうが、先に覚りの利益（りやく）を言えば、それは、このどちらの人々をも満足させることができるものであり、その楽しみは想像している以上のものであることを約束できるということになる。

しかも、覚った人は、この道を行んだことを決して後悔することがない。それどころか、よくぞ自分は、この一なる道を見出し、歩み、そして目的地たるニルヴァーナに到達することを得たのだと、しみじみと回顧することになるのである。

さて、覚りとは何か？

言い方は、様々だが、一言で言えば「目覚める」ということになる。

何から目覚めるのであるかと言えば、それは、世の顛倒から目覚めるということである。ここで、顛倒とは、「さかさま」というほどの意味である。

なぜならば、世間の人々（衆生）は、真つ直ぐなものが曲がつて見え、真に浄らかなものを見出すことができず、やさしさの何たるかを見失っているからである。そして、そのために人々は苦悩に喘ぎ、死を恐れているのである。

正しく覚ることによつて、それが正常となり、一切の苦悩がすでに終滅している自分自身を、一種の驚きとともに知ることになる。同時に、この世で為すべきことをすでに為し終えたことを知るのである。

ここに、すべての疑惑は去り、法（ダルマ）は明らかとなる。覚つた人は、人々がなぜ覚らないのが分かつており、どうすれば人々が覚れるのかをも知るに至る。そこで、因縁がある覚者は、人々に理法を説くこととなるのである。彼が、ブツダに他ならない。

ブツダの特質は、いわゆる十号によつて示される。すなわち、

如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、および仏世尊である。本書では、それぞれの意味についての詳細は割愛するが、要するにブツダとは、真実のやさしさの相を体現した、人を超えた存在であると言えば分かり易いかも知れない。

なお、人が覚ることについては、いかなる超越的存在をも仮定する必要がない。なぜならば、覚りは、自分以外の何にも依拠する必要がなく、その人自身が功徳を積むことによつて達成できるものだからである。そして、誰もが覚り得ると言えるだけの根拠がある。

このため、もろもろのブツダは、人々に広く理法を説くのである。ブツダは、ある人には理法を説くが、別のある人には説かないなどということはない。問われればすべての人に、平らかに理法を説くのである。（ただし、誰でも覚れると保証されているわけではない。）

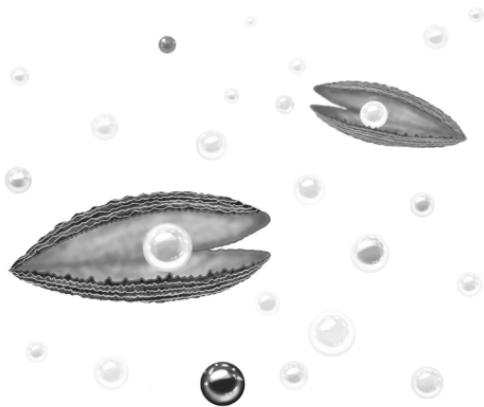
ところで、仏教は宗教の範疇には入らない。なぜならば、仏教には、祭るべき神はなく、奉じるべき対象物もなく、教義（ドグマ）もなく、行うべき儀式も捧げるべき供物も費もなく、死後に約束される世界もないからである。

仏教が説くのは、人であれば誰もが覚つてニルヴァーナに至り、住することができ得るということであり、そのため必要なことは基本的には簡潔で、容易に為し得る筈のことからであるということである。

また、覚りの素質や才能などは認められず、当人がここから望めば、誰もが等しくこの素晴らしい境地に到達することができる筈であるとも説かれる。仮に、生きている間に覚りに達することができなくても、その修行人生は決して後悔するものとはならないとも説かれる。

言うなれば、覚りにまつわることがらは、真の意味で良いこと、楽しいことだけがあり、しかもそれはすべて自分の力だけで得ることができるといふことである。

ここまで聞いて、ある人は、覚りの素晴らしさを了知することを得て、自分自身、覚りを  
目指す心を起こすであろう。そのような人は、すでに覚りの真実を、微かではあるが確かに  
覚知しているのである。



## 誰もが覚ることができ得る根拠

仏教、特に覚りそのものに興味を持った人が先ずハッキリさせたいことは、仏道修行に勤しみさえすれば本当に覚ることができ得るのかということであろう。そして、もしそれが本当であるとすれば、その根拠を示して欲しいということに違いあるまい。

なぜならば、それらが明確にならない限り、せつかくの修行が無駄になつてしまふのではないかという疑念が拭い去れないからである。要するに、修行者にとつて、仏道修行は、勤しみさえすれば必ず所定の結果が出るものであつて欲しいということであろう。

さて、誰もが覚り得るといふことの根拠は、実は覚りの経緯そのものに存在している。すなわち、人の心が覚りを欲し、その覚りを求める心が他ならぬ心を滅し、ついに作仏するという事実こそが、誰もが覚り得ることについての明確な根拠なのである。もちろん、自分が心を持つていると自覚していない人はいないであろう。であるならば、——それが自覚できているのであるならば——その人は覚ることができ得ると言えることになるのである。

たとえば、子供はいつかは大人になるものである。なぜならば、子供は、成長して大きくなると、ある時期に自分は大人になるのだという気持ちを起こすからである。そして、その気持ちに伴つて、子供は大人へと向かうことになるのである。もちろん、それですぐに大人

になるわけではないが、子供はこの時を境に精神的にも大きく成長し、同時にいろいろな学びや経験を経て、気がつけば大人になっているということになるわけである。

それと同じく、見せ掛けではない、真のしあわせを得たいという志のある人は、苦悩に満ちた一切世間を抜け出して無上の樂しみたるニルヴァーナを目指すようになる。そうして、その思いを背景として次第次第に功德が積まれ、それが充分に積まれたとき、覚りの因縁を生じて覚ることになるのである。

ところで、子供が大人になるのは、心身の成長という人間本来の仕組みに根ざしたものであり、それ自体が誰もがそのようになることの根拠となるものであると言えよう。その一方で、人が覚りの境地たるニルヴァーナをを目指す心を起こすのは、成長のような自然発生的なものではないと知らねばならない。

けれど、彼がニルヴァーナを目指す心を起こすのは、不可思議なる因縁によるものであるからである。

要するに、覚りの現実的な可否を左右するのは、本人の根底の求めの是非によるという一面を持っているということである。

このため、知らない間に覚っていた、などということは決して生じない。つまり、すべての人が覚り得るが、実際に覚りに達するのは、覚りを目指す正しい心（＝聖求）を起こした人だけということである。したがって、誰もが覚り得るとは説かれるが、誰もが覚るとは約束されないのである。

ただし、ここでは、聖求に関わることは一旦置いておいて、誰もが覚り得るといふ覚りのメカニズムについての根拠を述べることにしたい。

覚りのメカニズムとは、簡潔に言えば、心を覆う二つの覆いを取り除くことに他ならないということになる。すなわち、その心の覆いこそが、人を苦悩せしめている根源の要素であると見られるということである。

仏教では、その二つの覆いを、構成概念として、この名称と形態（nama-rupa）と呼んでいる。そして、その中の、この名称（nama）作用のみが終滅した場合を心解脱と呼び、この形態（rupa）作用のみが終滅した場合を身解脱、これら両方が終滅した場合を慧解脱と言う。なお、慧解脱した人を特にブツダと称する。

さて、ここで言いたいことは、要するに覺りとは、心を覆う覆いを取り除くことによつて達成されるという、ある種の現象に他ならず、それを達成しさえすれば誰もが覺りの境地に到達するということである。

つまり、覺りとは、学習や修練によつて何かを身につけたことによる結果ではなく、心を苦悩させる要因（＝苦の体）たる余計なもの——すなわちこの名称と形態——を滅しさえすれば達成できるものであるということである。

しかも、そのために必要なことは、誰もが容易にできる筈のことながら、すなわち、功德を積むことであると説かれる。また、このとき、功德を積むことに関しては、生まれながらの素質や才能などは認められず、あるいは貧富の差が問題になることもないと説かれる。さらには、たとえ身体の一部が不自由であつても、あるいは一部の機能が損なわれていても、それが功德を積むことにおいて障害になることはないとも説かれるのである。要するに、人であれば誰でも功德を積むことができ、ひいては覺りに達することができ得るということである。

また、心情面から言えば、「人は、誰もがやさしくありたいと願っている」ということ、そのこと、それ自体が、人が誰でも覺ることができると言える根拠のすべてであると言え言えるので

ある。なぜならば、覚りとは、真実のやさしさの相を体得することに他ならないからである。

このようなことを総合したとき、誰もが覚ることができ得る根拠があると云つて大過ないであろう。

ただし、注意すべき前提はある。それは、言葉を用いることについて不自由ではないことである。これは、言葉によつて覚りの機縁を生じるといふ真理と関連している。要するに、靈妙なる言葉の意味を理解し得ない子供や、言葉を曲解する傾向がある人は、覚ることは極めて難しいと言えるということである。

なお、覚りのメカニズムに関する細かい点——聖求、この名称と形態、法の句、善知識（化身）、因縁、仏性、および修行の実際など——については、後の章において適宜に説明を加えたいと思う。

## 覚った後、つまらなくなかないか

人々が、仏道修行に本気で勤しめない理由の一つとして、覚ってしまったと生きる楽しみがなくなってしまうのではないかと危惧していることが挙げられるようである。この点について、述べておきたい。

結論を言えば、それは杞憂であるということになる。なぜならば、覚りの境地は、この世の最高の楽しみであることは間違いないからである。そして、それは、私だけでなく、すべての覚った人が等しく抱く感想であるのだと断言できよう。

では、覚りの楽しみの実際とは何か。

覚りの楽しみの最たるものは、苦悩と憂いの滅である。ここで、苦悩の滅とは、現在における苦しみが無くなるという意味である。また、憂いの滅とは、未来について不吉なことがなくなり、また過去の行為を悔やむことがなくなるといふことである。

また、覚ると、人生において為すべきことをすべて為し終えたという実感を得ることができ。これは、この世で知るべきことを知り尽くし、この世でやり残したことがないという

ことであり、極端に言えば、いつ死んでも構わないという気持ちが定まるということである。

もちろん、死に急いでいるわけではない。実際の感覚は、この世のどんな新しいものを見ても、それに心がとらわれてしまうということがなく、言うなれば衆生世間に対する興味そのものがなくなっているということである。

たとえば、子供が大人になると、もう子供じみたことには興味を抱くことはないであろう。新しい子供の遊びが提案されてもそれに興じようとは思わず、あるいは新しいオモチャが発売されてもそれが欲しいとは思わないであろう。なぜならば、それらに対する根本の興味がすでに失われているからである。大人には、大人の世界があり、大人の楽しみが存在している。子供が大人になったとき、そのことを知り、大人の世界に対する興味で心は一杯になつてしまうのである。

同様に、覺り終えて、仏の世界に住するようになる、そこには、衆生世間の楽しみとは比べものにならない大きな楽しみと安らぎがあることを知ることになる。それを、ニルヴァーナと称するわけである。

このように、覚ると、世間的な喜怒哀楽はなくなり、慈悲喜捨に生きる存在となる。これは、要するに欲望に振り回されることのない境地ということである。

また、禅宗の六祖 慧能ブツダが説くとおり、貪嗔痴（三毒）が戒定慧へと転じることになる。これによつて、すべての行為は自ら矜持と責任を以て為すところのものとなり、自分ならざるものに翻弄されなくなる。これは、世界が自分を中心に回っているということではなく、自分が世界の中に確かに存在しているという実感を得ることであり、あらゆることからについて仏として行為することになるということである。実際、夢の中においてさえ、自分が仏であることを認識するようになる。

さらに、六識（眼耳鼻舌身意）による外界との接触が、煩いに結びつくことがなくなるということが挙げられよう。ただし、これによつて、何かを見聞きしたり味わったりしたときに、飛び上がるように嬉しく感じることもなくなってしまう。

それは、つまらないことではないのか？

これについては、次のように答えなければならない。

人々（衆生）は、何かを見聞きしたり、味わったりしたときに、飛び上がるように嬉しく感じることがあるだろう。しかしながら、人々がその刹那の楽しみにこだわるゆえに、それと同時に大きな苦悩を抱えることになってしまっているのである。

例えば、美味なる毒を飲まれたようなものである。この毒は、美味であるゆえに気づけば大量に飲み込んでしまうことになる。そして、この場合、毒の効き目もまた熾烈なものとならざるを得まい。つまり、良かれと思つて為したことが、抜き差しならぬ悲惨な結果の原因となる。このようなことが度重なると、彼は、何をどうしたら良いのか分からなくなつてしまうであろう。かと言つて、何もしないというわけには行かない。このため、世間のあらゆることがらが疑惑の対象と化してしまふことになる。欲しいものや、やりたいことがある。しかしながら、それが苦悩に結びついてしまふ。実に、世人は、ここに迷つてゐるのである。

このように、世間の歡樂は、楽しみは少なく、苦悩が大きいものである。すなわち、世人の行為は、すべて苦に帰着してしまふことである。その一方で、覺りの楽しみとは、その根本の苦が無くなつた境地に他ならない。要するに、この世のすべてについて楽しく、安心して接することができる境地である。しかも、そのことによつて、自分を含めて、誰一人として悲しませることがない。これを大団円の結末を見ると言う。

それだけでなく、覚ると、そもそも食事や娯楽に耽溺することがなくなる。もちろん、お腹さえ膨れれば何でも良いというわけではないが、特定の何かをどうしても食べたいなどと思ふことはなくなるということである。これは、結果的に、心身の健康に役立つようである。

また、覚った人は、雑多なことをしようとは思わない。生活は簡素になり、日々に静けさが全うされることになる。特定の何かを為さなければならぬなどということはない。すべては、自由である。だからと言って退屈することはない。世間の、ショッキングな出来事に目を奪われたり、逆に目を逸らしたり耳を塞ぐこともない。要するに、覚者は、静けさそのものを大いに楽しむ存在なのである。

このように、覚りの境地は、誰にとつても楽しく、素晴らしいものとなることは間違いないことである。ただ、世間の人々は、その楽しみの本当のことを知らない。そのためである。覚ろうとする気持ちをなかなか起こさないようである。そして、覚りを目指す気持ちがなければ、覚ることはない。知らぬ間に覚る、ということはないからである。つまり、人々が、覚った後には大いなる楽しみが待っているということを心から信じない限り、何も始まらないということである。覚りを目指すことのない人とは、大人になりたくないと言ふ子供のようなものである。

ところで、大人になりたくないと言う子供は、子供としての生活を楽しんでいることは間違いない。しかしながら、彼が大人になったとき、それとは違う次元の、より大きな楽しみがあることを知ることになる。実際、大人の楽しみは、子供じみた楽しみをすべて離れたものであるが、それとは別次元の、大きな楽しみであることは確かであろうからである。その証拠に、子供に戻りたいなどと本気で口にする大人など誰一人としていないからである。要するに、大人になりたくないと言う子供は、大人の世界の真実を知らないから、大人になることに怖じ気づいているのだと言えよう。

同様に、人々（衆生）は、覚りの楽しみの本当のところを知らない。そのために、人々は汚辱の世俗にしがみついて、淨らかな覚りを達成しようとは思わないのであろう。そして、「覚つた後はつまらないのではないか」などと合理化した、言い訳めいたことを考えてしまふ者が出てくるのに違いあるまい。

もちろん、誰にとつても、未踏の分野に踏み込むことには恐怖を覚えるであろう。なおかつ、覚りの場合、世俗の楽しみがすべてなくなるとさえ説かれるのであるから、人々が道を歩むことに怖じ気づくのは無理もないことであるとも言えよう。ただ、それにもかかわらず、ある人は、覚りの境地の素晴らしさを信じて道を歩むようになる。そうして、ついにニルヴァーナへと到達するのである。

このように、覺りの道を歩むのも、歩まないのも、各自のことからである。覺りの境地がどんなに素晴らしいものであるとしても、それを目指そうとするか否かは、本人が決めることである。

なお、覺りを目指す人は、けしかけられてはならない。また、自分で自分をけしかけてもいけない。何となれば、それでは覺りは生じないからである。よつて、覺りが素晴らしい境地に違いないと思うに至つても、それを心から求めない間は、覺りを目指すには時期早尚であるのだと考えるべきである。

では、いつ仏道修行を始めれば良いのであるか。それは、どうしても仏道修行に勤しみたいという、逆らえない気持ちが生じたときである。そのときこそ、本気で道を歩み始めるのが良いであろう。ニルヴァーナへと至るこの一なる道は、すべての人の前に、いつでも、確かに存在している。慌てずに、道を歩むべき時期を待ち、来るべきときにこそ、しっかりと歩むべきである。そうして、目的を遂げるべきである。そのとき、首記の疑問は消散し、覺りの境地が本当に素晴らしい、人の最高の楽しみみの境地であることを知るであろう。